総　括
――「方法論的ナショナリズム」の相対化を求めて――

西村成雄

2007 年度のシンポジウム「20 世紀中国史再考―ナショナリズム」は，企画主旨（川尻文彦会員報告）によれば 20 世紀というスパンでナショナリズムの分析視角から中国近現代史の諸論点を再照射することにあった。第一報告は，茂木敏夫氏による「中華世界の再編と 20 世紀ナショナリズム―抵抗／抑圧の表裏一体性」で，19 世紀段階の中華世界の再編と 20 世紀における中国の「鋳造」過程から世紀交替期と 20 世紀中国の「ナショナリズム」を俯瞰し再定義する試みを提起した。第二報告は，江田憲治氏による「民国期ナショナリズムの構造と特質―デモクラシーとの関連に注目して」で，1925 年五・三〇事件にあらわれた「非暴力」的性格とその民主主義的（デモクラシー的）要素が「排外主義に発展しかねない状況」にあったナショナリズムへの「ブレーキ役」を果たしたとする実証的分析を試みた。第三報告は，加々美光行氏による「竹内好再考と有根のナショナリズム」で，現代日中双方のナショナリズム現象を，竹内好の有根の等身大非政治的ナショナリズムと，国家からみる無根のナショナリズムの対比としてとらえ，国家に回収されない個人の草の根レベルのアイデンティティの視角から「根拠地」論の再解釈を試みた。

これら三報告に対して，それぞれディスカッサントが問題提起し，フロアからも多くの議論が提起された。その諸論点については，前掲の各ディスカッサントのコメントを御覧いただき，ここでは，三報告の問題関心の多様性にもかかわらずそこに通底する 20 世紀中国認識をめぐる明示的あるいは暗黙の前提を抽出して，今後の中国ナショナリズム論のひとつの素材とすることができればと思う。それは，本年度の企画主旨にも照応することになるだろう。

さて，三報告が共有するナショナリズム分析の方向性は次の点にあったと考えられる。すなわち，中国近現代史研究のかなり明示的な前提となっている「方法論的ナショナリズム」そのものを相対化する，あるいは相対化しうるようなオルタナティヴな認識が求められているとするところにある。ここでいう「方法論的ナショナリズム」という言説には，ラウル・ジラルデ（Raoul Girardet）の概括を援用すれば，主として 4 点の問題系にかかわる「根強い信奉」を含んでいる（中谷猛他訳『現代世界とさまざまなナショナリズム』晃洋書房，

2004 年，pp. 35 － 44，原著は *Nationalismes et Nation*, 1996）。

すなわち，まず「主権のテーマ」であり，とくに「隷属した民族のナショナリズムのイデオロギーにおいて根本的」な「至上命題」であった。と同時に，「国民国家が確立されても，主権のテーマは決定的でありつづける」のであり，「独立を擁護し，国民という観念的存在の偉大さを主張」し，「国民感情の高揚」をナショナリズムのシンボルとする特徴を保持する。しかし，前者の国家の側から起動する「ナショナリストのナショナリズム」と「一般的感情のナショナリズム」を区分する必要がある。

次に「統一のテーマ」であり，「ナショナリズムは，選択なり忠誠なり帰属といったものが，多様であり複数であることを容認できない」傾向をもち，「独自な地域主義と戦い，分裂を抑え，国内対立の芽を摘み取る」という「排除の原理」が作用する。この「統一の意志」は，対外的境界線とナショナリズムによって観念される範囲まで及ぶとともに，対内的に，「国民的一体性」のための浸透力を諸制度として定着させようとする。

第三に「歴史主義のテーマ」であり，「統一への意志は，歴史によって伝えられた諸価値に対するつねに変わらない感受性」と結びつき，19 世紀ヨーロッパの国民統一運動に示された正当化の根拠はここにあった。しかも「遺産や伝統がもっているいくつかの根源的な価値」を新たに創造することも含めた「歴史物語の再生」と，「歴史教育」による「偉大な集団的神話」が創出される。「このことは，自分たちの『革命的』性格をこのうえなく大胆に主張してやまない人たちすべてにもやはり当てはまる」ことになる。

第四に「普遍性のテーマ」であり，「国民的過去の顕彰から国民的文明の持つ普遍的価値の肯定へと移行する」ナショナリズムは，「必然的に国民国家の境界を超え」「多少とも普遍的な影響力を持つ使命感が潜んでいる」。その意味で，「みずからが典型としておさまっているだけで満足するようなナショナリズムはまれでさえ」あり，「フランス人による神の事業」「アメリカ流の生活様式が最高」「アフリカの特性の一般的価値としての肯定」などの「メシアニズム」的要素が含まれていることになる。

こうした四問題系にかかわる「信奉」こそ，明示的あるいは暗黙の前提としてナショナリズム分析が陥りやすい罠とでもいっていい傾向を示している。国民国家の形成過程段階や確立後の段階を問わず，主権，統一，歴史主義，普遍性はさまざまな局面にその姿をあらわすが，基本的にはフランス帝国主義研究から導かれたこの四問題系の概括は，とりわけ「20 世紀中国ナショナリズム分析」にも妥当するものと判断しうる。「主権」は 20 世紀中国国民国家形成途上にあってまさに至上命題であり，さしあたりの到達点を経過したとしてもなお追求しつづけなければならない原理的課題として認識されつづけたし，そのエネルギーはさまざまなチャネルと形態をもって補給されてきた。茂木報告は，この「主権」と「歴史認識」にかかわる論点を軸に中国ナショナリズムの特徴付けを展開したといえよう。と同時に国民国家としての「統一」にかかわる歴史的諸条件を提起したものととらえられる。

こうした政治的次元の論点との対比で，江田報告と加々美報告は，「ナショナリズムとさまざまな社会集団」との関係をとりあげ，その社会内部の政治的諸編成にかかわる論点を提起した。すなわち，江田報告では，ナショナリズムの担い手のとして出現したと考えられてきた労働者社会集団が，実は「一般的感情のナショナリズム」を抑制しうる役割を果たしうる政治的民主主義を内包しえていたと論証する。ここには，四問題系すべてに関連する罠を自覚しうる社会的基盤が形成されていたとするナショナリズムと民主主義の緊張関係が視野に入っている。つまり，政治的民主主義思想の導入とその一定の「定着」の歴史的段階としての 1920 年代労働運動の質を「一般的感情のナショナリズム」への批判的立場の表明として再定置しようとした。加々美報告にあっても，社会内部の政治的諸編成に示された特定の社会集団の主体的なナショナリズム受容に「有根のナショナリズム」を発見しうるとし，対比的に国家のコロラリーから生じた「無根のナショナリズム」の虚構性をあきらかにしようとする。その意味で，ナショナリズム現象の社会的受容体の側の論点を積極的に提起したものといえよう。

このようにみてくると，ナショナリストのナショナリズムが形成し制度化した国民国家の正統性は，社会内部の被治者の同意をどのように獲得しているのか，また，ナショナリストのいう正統性は，社会的容量をどの程度汲みあげているのか，などの課題が残されていることに気付く。つまり，全社会的容量からみれば，「一般的感情」を含めたナショナリズムというイデオロギーやその社会的運動量は限定的たらざるをえないというべきであり，その限りで，より多様性をもった社会的運動量のあり方を再発見し位置付けることが要請されることになる。この論点は，ナショナリストのみならず，勝利したコミュニストの限界についても妥当する。

かくて，「方法論的ナショナリズム」を前提とした 20 世紀中国史認識は，四問題系にかかわる「根強い信奉」という言説を相対化しうる程度にまで視野を広げておく必要がある。その方向性は，茂木報告にいう国民国家としての政治空間形成と社会的均質化をはかる「主流の側の論理」のもつ暴力性を批判する社会的存在への注目であり，江田報告にいう「デモクラシーが，中国のナショナリズムの鋭角性を解決していくだろう」とする視角であり，加々美報告にいう竹内好の「敗北を自覚しつつ，なお抵抗を持続させる」課題の重要性と緊急性のなかに示されている。

20 世紀中国史再考の視角としてのナショナリズム言説の有効性を承認しつつ，さらにわれわれの新たな視野を拡大する課題は，従来の歴史的認識の磁場を相対化し，歴史研究のより豊かな可能性を歴史的現実の多様性の再発見に求められるだろう。三報告に通底する到達点は，あえて単純化するとすれば，20 世紀中国社会の全容量から「方法論的ナショナリズム」言説を相対化し，その言説の限界を自覚化し，20 世紀中国の国家と社会のオルタナティヴな認識を獲得しようとする点にあった。そのひとつの方向性は，たとえば「憲政」導入に示された政治的民主主義の思想と運動が四問題系の各局面にどのように作用し，か

つ政治的制度化がどのように準備されていたかを実証的に復元し再定置することなどにあるといえよう。その最近の成果は，水羽信男『近代中国のリベラリズム』（東方書店，2007年）にも示されている。

その意味で，2006年から2007年前半期にかけて，中国でもひとつのナショナリズム言説をめぐる議論が展開していたことに注目したい。この議論もより広い歴史的文脈に位置付けるとすれば，「方法論的ナショナリズム」あるいは「ナショナルな公理」の再審という性格をもったものといえるだろう。ここでは論及する紙幅がないので，下記の関連文献を参照いただきたい。

袁偉時（武吉次郎監訳）『中国の歴史教科書問題―「氷点」事件の記録と反省―』日本華僑社，2006年10月。
「特輯：近代民族主義」複印報刊資料『中国近代史』2006年10月。
袁偉時「近代経済民族主義的是非功過」『二十一世紀（双月刊）』2007年4月（総第100期）。
『第二届中国近代思想史国際学術研討会：論文集（上）（下）』中国社会科学院近代史研究所思想史研究室，魯東大学歴史与文化学院，2006年8月20日－22日，煙台。

司会者としての役割を果たさずに一つのコメントとしてまとめたことを各報告者，ディスカッサントおよび参加各位におわび申し上げる。

（にしむら　しげお・大阪大学）